

## 反軍隊・反基地の日米交流が立川で

古荘斗糸子

「抵抗する勇氣——courage to resist」日米交流ツアー——立川でも実現

実行委員会には共催（一二団体）、協賛（三〇団体・個人）が参加し、共催・協賛以外の方々からも、「チラシを配ります」「チケットを預かります」という申し出がいくつもあり、反応はとても良かったのです。ところが間近にチケットの売れ行きが伸び悩んだのは予想外でした。それでもホールは、ほぼ埋まってホッとしました（二回の上映はそれぞれ一二六名、一三一一名。お話の会は一六一名の参加）。

二人のゲストに、直前にもう一人が加わりました。たっぷり三時間取ったお話の会ですが、まだまだ質問したいことがあったという声も聞きました。

ジェフ・パターソンさん（四〇歳）は、湾岸戦争を拒否した元海兵隊員。二ヶ月間牢屋に入り、除隊。その後、出兵を拒否する兵士やその家族を支援する組織「抵抗する勇氣（courage to resist）」を設立し、活動しています。広島への原爆投下の映像を見せられ、「核を使って街を破壊し、人々を殺せ」という上官のことがイラク出兵を拒否するきっかけになった、そうです。沖繩に駐留したとき、沖繩の人々や沖繩の文化に触れる機会は禁止されていて、今回の来日で、初めて日本食を食べた、ということが印象的でした。

ダイアナ・ロペスさん（二〇歳）はメキシコ移民二世の大学生で、テキサス州サンアントニオ在住。幼い頃から空軍のパイロットに憧れていたが、ジルさんら「南西地域労働組合」の励ましで空軍入隊を思いとどまります。ジル・ジョンストンさん（二七歳）は、同労組の先輩活動家で、彼女たちはケリー空軍基地の深刻な汚染・基地被害の問題に取り組んでいます。映画にも、殆どの家にガン患者が出ている住宅街が出てきます。英語が話せない貧しいメキシコ系労働者も多く、健康被害を訴えても「汚

染は基地の外には及ばない。トルティエヤの食い過ぎだ」などと言われる。環境問題は、それだけのテーマではない。労働・生活・平和と深く関わっている、と二人は訴えました。

ケリー基地周辺の汚染地域は、まるでアメリカ国内の植民地だと感じました。人々が差別され、汚染を押しつけられている現実は、沖繩やグアムが差別を受け、基地負担を押しつけられている現実と重なります。

ツアーのメンバーは、一日に座間で住民たちの基地反対運動に参加します。「私たちがアメリカでやっていることと同じ」と感想を語ったことが印象的でした。

「行動し続けよう」というメッセージ

二時間の映画上映を二回と三時間のお話の会の後の交流会も盛り上がりしました。交流会の最後に、ダイアナさんが実行委員会にプレゼントした、丸い木製のプレートの裏面には、スペイン語で「行動し続けよう」というメッセージが書かれていました。

実行委員会は、「貧困徴兵制」は近未来の日本の問題だ」と感じて始まりました。三多摩地域の枠を越えて新しく出会い、お互いに学び合う機会が持てました。

総括会議のなかでテキサス州のこと、ケリー基地のこと、民営化されてどうなっていくのか、そして日本では米兵への呼びかけ、自衛隊員への働きかけをどう進められるのか、という話も出て、サンアントニオへのツアーができたなら、という話も出ました。

三時間のお話の会を録音・録画をしたのがあります。（ふるしょう・としこ／うちなんちゅの怒りとともに！三多摩市民の会）